

二〇二二年二月三日

古書店は一坪あまり秋ともし
生徒らのコーナー街の菊花展
吊し柿簾をなせる旧家かな
花嫁は白無垢と見し菊衣
写真展我が街百景文化の日
嵐電の車窓に古都の秋惜しむ

二〇二二年二月二日

末枯れの野にいと小さき忠魂碑
暗き庭なれど一隅石路明かり
炉を開く心尽くしのお善哉
日を弾き錐もみ落つる銀杏かな
白塀にりりしき影や貴船菊
秋の水掬ふ蒼天揺るがせて

二〇二二年二月一日

高階の茶房に街の秋惜しむ
産土に在す大銀杏散り敷ける
禅寺の掃かれし庭へ銀杏散る
竹林の俄に翳り嵯峨時雨
秋惜しむ野宮の径たもとほり
菊日和うぐゑす張りの高鳴りて

二〇二二年一〇月三十一日

な踏みそ五彩の落葉磴に散る
コーヒーの熱きを所望秋の人
清盛の贅といふべき菊衣
裏庭に鶉騒がしき小春かな

とろうち

せいじ

つくし

よし女

満天

菜々

ぼんこ

ともえ

わかば

よし女

あさこ

とろうち

はく子

雅流

雅流

宏虎

菜々

菜々

ぼんこ

宏虎

満天

あさこ

喬木の裾を火に染む蔦紅葉

猫呼んで戸締まり終へる十三夜

紙漉きの煙たなびく峽の里

二〇二二年一〇月三〇日

中天に白研ぎ澄ます後の月
家々の路地の間より後の月
栗名月薨を濡らす峽の里
家老門潜るや石路の花明り

二〇二二年一〇月二十九日

行く雲を追ひかけて去ぬ燕かな
水脈白く船の行き交ふ秋の潮
教会の暈に五彩秋日影
クリスタルビルを過ぎりて秋の雲
激つ瀬の岩に張りつく散り紅葉
夕焼に弧の水脈描き入港す
色鳥来山の城趾の野面積

二〇二二年一〇月二十八日

すれ違ふ猫知らぬ顔十三夜
星座盤かざして仰ぐ星月夜
秋ともし床屋の古き大時計
夕茜秋耕人の影法師
風にひれ伏しては直る秋桜
明日香路雲たずさへて十三夜

ともえ

有香

さつき

菜々

はく子

菜々

三刀

さつき

よし子

三刀

満天

さつき

うつき

とろうち

有香

さつき

なつき

よし子

百合

宏虎

毎日句会みのる選・二〇二二年一月五日